

保育場面の環境の意味付与に関する研究

～絵本の読み聞かせにおける4背景の興味を示した行動についての分析～

A Study on Giving the Meanings of the Environment in Childcare Scenes: An Analysis of Behaviors Showing Interest in Four Backgrounds of Reading Picture Books

熊田凡子*, 高村真希**

要 旨

本稿の目的は、保育場面の環境の意味付与について、幼児の行動から分析する保育環境の研究手法を提示し検討することである。本稿では、保育場面の中でも、絵本の読み聞かせにおける背景画面、とりわけ色の違いに着目し、読み聞かせ実践のビデオ撮影による幼児の動きを、小林(1997)のカテゴリーの「興味を示した行動」と「示さなかった行動」に加味したカテゴリーを基に、幼児の興味の傾向について分析した。結果、白色の背景画面では、幼児の興味を示した行動が生じやすく、また興味を示さなかった行動も見られにくいことが明らかになった。さらに、物が混雑した状況で視覚的刺激を多く含む背景場面では、幼児の興味を示した行動が現れにくいことが示された。こうした点から、保育に携わる保育者は、幼児が関わる場面の画面や配置などを含めた環境を保育環境として認識し、環境が幼児にもたらす意味・価値を検討すべきではないか。

[キーワード] 絵本の読み聞かせ、背景の色、行動分析、保育環境、映像分析

1. はじめに

2018年(平成30)年度実施の新学習指導要領では学校は地域と連携し、よりよい教育を目指すことが示された。新幼稚園教育要領においても幼児期における保育は「環境を通して行う」教育であるとの理念が総則においても明記されている。また、新保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様に、環境については意識されている。つまり、保育は、環境を通して行うものであることを基本とし、園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならない。

また、新小学校学習指導要領及び新幼稚園教育指導要領・新保育所保育指針・新幼保連携型認定こども園教育・保育要領いずれの法令改訂では、「主体的・対話的で深い学び」とあるように新たな文言によって、子どもの育ち(学び)は自らの応答、つまり主体性を持った1人の人格が育つ(学ぶ)ことが基盤にあることを示している。

乳幼児の育ちを支える保育環境に関する研究は、これまで室内環境に着目され、戸外環境には目を向けられていなかったが、近年、戸外あそびの環境や地域にも検討がされつつあるようだ。また、こうした幼児の遊ぶ環境(場所)については、従来、保育者側からの推察等に基づく研究であったのが、幼児の視点から捉える環境との結び付きを可視化する分析が試みられてい

* 江戸川大学メディアコミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科講師 教育史・乳幼児教育学

** 北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科助教 保育学・教育工学・保育者養成学

る。こうした保育環境がもたらす乳幼児にとっての認識、価値、意味について追究し始めている一方、幼児の話し合っている場面、集団で同じ活動をしている場面等、保育場面での空間や雰囲気といった環境が幼児に与える影響や意味については、着手されていないようである。

幼児の主體的な育ちを支える保育場面の環境についての分析には、いかなる研究手法が考えられるのか。

本稿では、次の研究からなる研究手法を提示すると共に、保育場面の環境の意味付与について考えてみたい。

2. 研究の背景

幼児は園の環境の中でさまざまなものと出会い、自身の心を動かし、自らの表現を通して自分を知る。筆者高村は2018年から幼児の表現の一つとして絵本の読み聞かせにおける幼児の反応に着目して研究を進めてきた。幼児は絵本の読み聞かせを通して、登場人物に自分を重ね合わせ主人公に心を寄せる体験をしながら自身の表現を育てていく。このような幼児の発達からも、絵本の世界に入り込むことができる環境で読み聞かせを行うことが必要であるといえるであろう。

筆者高村は、先の研究で絵本の読み聞かせによる幼児の反応に関する研究として、小林(1997)の先行研究を参照にしつつ、白・桃・緑色の3つの背景画面における読み聞かせ時の幼児の興味反応を明らかにしようと試みた。しかし、先の方法では、一人の幼児の特出した反応に他の幼児の結果が左右されてしまうことが明らかとなった。そこで、本研究ではクラス全体として数値を読み取るのではなく、読み聞かせの全インターバルから幼児一人一人の興味行動の割合を算出し、個人での結果を見比べる方法に変更して分析を行う。さらに今回は、日ごろの保育室での絵本の読み聞かせ場面を想定し、背景画面を1場面増やして分析を行うこととする。場面としては、読み聞かせの背景画面に多くの視覚的刺激がある場面である。

本研究では、幼児が絵本に興味を示すための

物的環境の中でも絵本を読み聞かせる背景画面に着目する。白・桃・緑色の背景画面に、さまざまな視覚的刺激的の多い背景画面（以下、色々な場面と記す）を加え、4つの背景画面の違いによる幼児の興味を示した行動の変化について明らかにする。

2. 読み聞かせについて

2.1.1 絵本の読み読み聞かせの定義

生田(2013)によると、「絵本の読み聞かせとは読み手が聞き手に対し、絵を見せながら文を読む行為をいう。一方的に聞かせるのではなく、読み手と聞き手の心が通じ合い、楽しさを分かち合う相互関係が重要である¹⁾」つまり、絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手の言葉と感情のやり取り（応答）の場であるといえる。

2.1.2 絵本の読み聞かせの意義

瀧(2010)によると、子どもは絵本を読み聞かせてもらうことで、大人のぬくもりを感じ、自分は大切にされ、愛されている存在であるという「自己肯定感」を持つことができるという。また、子どもが実体験で経験できることは限られているため、絵本を通して読み手と思いを共有する体験が重要である。さらに、絵本には「生きるための知恵やメッセージ」が隠されているようだ。

現在、絵本の読み聞かせは保育園・幼稚園などの就学前だけでなく、小学校でも日常的に行われ、教師と生徒の信頼関係を築く一助となっている。

2.1.3 読み聞かせの効果

子どもは、大人に絵本を読んでもらうことを通して、自分に読んでもらったことでの幸福感や安心感を感じとることができる。また、描かれている絵を隅から隅まで眺めることによって、登場人物に自分を重ねたり、主人公の気持ちや場面の雰囲気を感じとったりし、その時々に合わせて心を動かすことができる。これは、読み手の子どもが文を耳で聴き、絵の表現を読みとくことで主人公と同化する体験である。この子どもの心と身体をくぐった体験こそ

が子どもの表現したい気持ちを促すのである。さらに、余郷（2010）は絵本の読み聞かせは子どもにとって授乳と同じ心地良さがあるとし、この心地良さが脳を活性化させ、心身ともに健全な成長発達を促すと述べている。

2.2 絵本の絵による効果

藤本（2015）は、絵本は「ことば」と「絵」の二種類の要素が組み合わさることによって情報が伝達されるものであると言う。絵本のことばはストーリーを伝える要素であるが、絵本の絵は物語を語る要素であり、絵本の面白さは絵が語るということである。また、文字という言葉の意味が十分に理解できない子どもであったとしても、絵から情報を得ることができ、絵本を感じるができるであろう。

2.3 絵本の絵の色合いによる効果

人は暖色系の色を見ると温かみを感じ、寒色系の色を見ると冷たさを感じる。また、藤本（2015）によれば、赤色や黄色は前に飛び出てくるように感じるが、青色や紺色は遠ざかっていくように感じる色である。絵本作家は絵の色合いの組み合わせから主人公の気持ちを表現する等、人が色から感じる効果をうまく使って読み手に絵本の情報を伝達する。

3. 目的

筆者高村は、幼児が興味を示す行動を捉えるために、絵本の読み聞かせに焦点を当て、研究を進めてきた。本研究では、「人の心を落ち着かせる効果やリラックスする効果があると言われる色である白・桃・緑色を背景とした場合」と、「さまざまな刺激が多い色々の場面を背景とした場合」の計4つの背景画面で読み聞かせを行う。その際に、それぞれの背景画面による、「幼児の絵本の読み聞かせに興味を示した行動」に違いがあるのかを明らかとする。興味行動のカテゴリーについては、「5. 分析方法」に記載した。

4. 調査の概要

4.1 調査対象

石川県にあるA保幼園の3歳児18名のうち、4回すべての読み聞かせに参加した12名を対象とした。

4.2 調査期間

2018年9月～10月
全4回の読み聞かせを実施した。

4.3 調査場所

石川県にあるA保幼園の遊びスペース。

どの回も読み聞かせには、廊下にある広い遊びスペースを使用した。事前に保育者用の椅子を設置し、幼児の座る場所はその前であれば自由とした。

4.4 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、事前にA保幼園に調査目的を説明し、実施の許可を得た。なお、プライバシー保護のため、映像・写真を撮影することに関して対象児の保護者に許可を得た。

4.5 実践

4.5.1 読み手について

読み手は担当保育者A氏と限定した。A氏は保育歴7年目であり、このクラスの幼児を担当するのは初めてである。読み手の行動や語り方などについてはこちらから指示はせず、普段通りの流れで行ってもらった。

流れ：手遊びから絵本に入るが、その際には多くの語りかけは行わない。また、読み聞かせ中に幼児に声をかける・質問する等の積極的な働きかけは行わなかった。

4.5.2 選択した絵本について

4.5.2.1 3歳児の発達から

瀧（2010）は、3歳児は食事・着替えなどの生活面において自分一人のできるようになり、大人のすることに対して興味を示し、自らもやってみようとする時期であるという。また、この「自分でできた」ということが自尊感情を高め、

人格形成の基盤を作ると述べている。そのため、3歳児頃には絵本の主人公に同化して楽しめるような日常の生活を題材にした絵本が幼児を惹きつけるといえる。

4.5.2.2 絵本の題目と使用時間・作者等について

小林（1997）が先行研究の中で、絵本は読み込むごとに幼児の集中力や熟知度が上がることを明らかにしていたため、今回は対象児がA保育園で現在までに読み聞かせてもらったことがない絵本を選択し、4回全て異なった絵本を用意した。

さらに、本研究では絵の描かれ方（線のタッチ・色合い）に着目し、絵本の作者と絵作家を林明子と筒井頼子の作品に限定することとした。絵本の描かれ方に着目したことで、絵本の題材や内容・絵本のサイズ・使用時間等は全て統一することができなかったが、3歳児の発達に適していると思われる絵本を使用し、読み聞かせを行った。使用時間については、小林（1997）の「集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応・年齢・性差と座席の位置による影響について」という先行研究の中で、3歳児は4分15秒の読み聞かせであれば80%程度集中できていたという論が述べられていたため、その時間内で収まる絵本を選択したいと考えたが、時間以外の条件を統一したため、3回目と4回目の絵本はその時間をオーバーするものとなった。実際に読み聞かせを行った絵本は、以下の通りである。

（選択した絵本の題目）

- 1回目：「おでかけのまえに」 出版年：1980
- 2回目：「おいていかないで」 出版年：1981
- 3回目：「あさえと ちいさいもうと」
出版年：1983
- 4回目：「いもうとのにゅういん」
出版年：1979

* 絵本の内容等、詳細は文末[注]に掲載した。(表7)

4.6 読み聞かせの状況

調査時間は幼児にとって時間的環境が変化しないように、日頃の保育と同様の時間に読み聞かせを行い、日課を変化させることがないように配慮した。時間は昼食後の12時15分から12

時30分の間の5～10分程度で行った。

この時間は1～5歳児が昼食から午睡へ移る時間であったため、読み聞かせ中も周りの人の声や物音が聞こえたり、人が行きかたりする様子もあったが、日頃の保育の中での読み聞かせを調査したかったため、それを全て遮るようなことはしなかった。

4.7 ビデオの設置場所

今回の調査では、ビデオカメラ3台を使用した。ビデオカメラは読み聞かせ中の対象者の様子を記録することを目的に、図1のように対象者の前方に2台・後方に1台設置した。また、後方カメラは読み聞かせ中の読み手の姿が映るように設置した。さらに、ビデオカメラの高さは幼児の座った時の目線の高さとした。しかし、4回目の色々の場面ではカメラの位置が1～3回目と多少変化している。(図2)

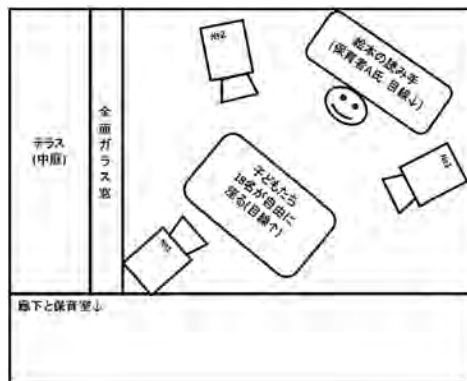


図1 1～3回目の実践時のカメラ位置

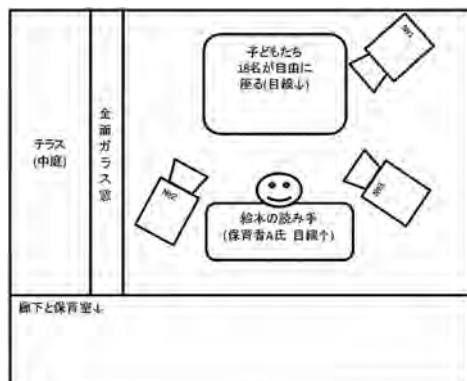


図2 4回目の実践時のカメラ位置

ビデオカメラで撮影するにあたり、幼児が普段通りに読み聞かせを聞けるように、事前にビデオカメラに慣れることを目的とし、実践の前にビデオカメラを設置した環境で絵本の読み聞かせを行った。そして、撮影者に慣れてもらうことも重要であると考え、事前に撮影者も対象児のクラスの保育に参加し、一緒に遊び触れ合う時間を設けた。その際には、幼児の遊ぶ姿を録画はしていないが、ビデオを構えて見守った。

4.8 背景画面の選択

絵本の背景画面は、リラックス効果があるとされる色の中から白・桃・緑の3色を選択した。また、さまざまなものが目に入り、視覚的刺激が多い背景画面(図3)も選択し、全4つの背景画面で読み聞かせを行った。(3色の効果については、筆者高村の先行研究『北陸学院大学北陸学院大学短期大学部 教職課程研究 第7号 2020年2月発刊』に記載。)



図3 色々の場面での読み聞かせ

5. 分析方法

5.1 分析手順

絵本の読み聞かせ実践から幼児が興味を示した行動を捉えるために、次の①～④の手順で行った。

- ① 多視点映像記録から幼児が興味を示した行動を読み取る
- ・幼児の読み聞かせ場面を3台の定点カメラで読み取る。

② 逐次発語記録の作成

- ・小林(1997)による「絵本に対して関心を示した行動」と「関心を示さなかった行動」のカテゴリーを参照しつつ、そこに新たに必要カテゴリーとシステムを追加し、逐次発語記録を作成する。追加したカテゴリーは興味を示さなかった行動に「背景画面を見る」と興味を示した行動と示さなかった行動の両方に「その他」を追加した。

表1 小林(1997)の興味を示した行動のカテゴリーを参照し、新たに作成したカテゴリー

① 視線が本を向いており、興味を示している
② その場面に興味を示し、発言する
③ 本の近くまで寄って行って指す
④ 笑い声をあげる
⑤ 他の友だちとおもしろかったことを言い合う
⑥ 絵本の場面を真似する
⑦ 集中しているが、体が動いている
⑧ 前に乗り出す
⑨ 微笑する
⑩ 驚く
⑪ 保育者を見る
⑫ その他

表2 小林(1997)の興味を示さなかった行動のカテゴリーを参照し、新たに作成したカテゴリー

① 手足をもじもじさせて、落ち着かない
② 横の友だちと関係のない話をする
③ 視線は本を向いているが、興味を示していない
④ ぼーっとしている・あくびをしている
⑤ 全く違う方を向いている
⑥ 背景画面を見る
⑦ その他

③ 逐次発語記録への記入

- ・ビデオカメラで撮影した幼児の反応を1秒ごとに項目にチェックを入れた。インターバルを1秒間としたのは、複数の行動が同時に出る場合に判断に迷いが生じないためである。さらに、その他の動きに関しては「その他」の欄に記入した。幼児の姿勢や座った場所の関係で画面に映っていない時間は分析の対象から除外した。

表3 一人一人の興味を示した行動のカテゴリー別割合の一部

幼児	色	総タイム (a)	興味を示した行動																合計					
			①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨		⑩		⑪	
			タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合
A児	色々	384	302	94.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	19	4.9%	301	92.8%
	白	178	173	97.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.1%	176	98.9%
	桃	178	175	97.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	2.8%	173	97.2%
	緑	318	299	94.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	13	4.1%	286	90.0%

表4 一人一人の興味を示さなかった行動のカテゴリー別割合の一部

幼児	色	総タイム (a)	興味を示さなかった行動										合計					
			①		②		③		④		⑤		⑥		⑦			
			タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合	タイム	割合		
A児	色々	384	0	0.0%	0	0.0%	5	1.3%	0	0.0%	12	3.1%	0	0.0%	14	3.6%	31	8.1%
	白	178	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.1%	0	0.0%	1	0.6%	3	1.7%
	桃	178	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.1%	0	0.0%	2	1.1%	4	2.2%
	緑	318	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	2.5%	0	0.0%	0	0.0%	8	2.5%

④ 個人の結果を見比べる

・一人一人のカテゴリー別に示された行動を全行動から全行動を除いて比率に換算し、出現率を表した。その後、個人の結果を「興味を示した行動」「興味を示さなかった行動」にわけて一覧にし、見比べた。(表3・4)

5.2 協力者

カテゴリーへの分類の際には、保育者養成校で学ぶ学生2名に協力を依頼した。判断しづらい反応があった場合には、どのカテゴリーに分類すべきかを複数名で確認した。

6. 分析結果と考察

6.1 一人一人の興味を示した行動の割合の合計の結果から

一人一人の興味を示した行動のカテゴリー別割合の結果(表5)からは、12名中5名が白色の背景画面であった場合に、興味を示した行動を最も多く見せた。次いで緑色の背景画面では4名、桃色の背景画面では3名、色々の背景画面では2名という結果であった。C児のように、どの背景画面でも結果の数値が同じであった場合は、それぞれの背景画面において最も興味を示したとし、カウントしてある。

反対に興味を示した行動の割合が低い背景画面の結果は、色々の背景画面では7名、次いで緑

表5 一人一人の興味を示した行動の割合の合計より

	興味を示した行動の割合(合計)			
	色々(%)	白(%)	桃(%)	緑(%)
A児	99.2	98.9	100.6	139.6
B児	99.2	101.7	98.3	96.5
C児	94.0	99.4	99.4	99.4
D児	85.7	100.0	110.6	79.6
E児	89.3	100.0	101.7	105.3
F児	104.2	100.0	102.8	99.7
G児	99.7	100.0	100.0	102.2
H児	94.5	100.0	98.9	98.1
I児	44.8	129.8	85.5	114.8
J児	62.0	168.0	107.8	167.6
K児	68.8	97.2	102.8	102.2
L児	118.8	109.0	102.2	92.1

色の背景画面で4名、白色の背景画面では1名、桃色の背景画面では0名という結果であった。

以上のことより色々の背景画面は、最も興味を示した行動が起こりにくいと言える。反対に、白色の背景画面は最も興味を示した行動が起こりやすい環境であり、次いで桃色の背景画面もまた興味を示した行動が起こりやすいといえる。緑色の背景画面については、今回の結果では、興味を示しやすいとも示しにくいとも言い難い。

6.2 一人一人の興味を示さなかった行動の結果から

表6の結果より、12名中9名が色々の背景画面で興味を示さなかった行動を最も多く見せた。

次いで、緑色の背景画面では3名が、白色と桃色の背景画面では0名という結果であった。

反対に、興味を示さなかった行動の割合が低い背景画面の結果は白色で9名であり、次いで桃色が3名、緑色が1名、色々の場面では0名という結果であった。白色の背景画面では12名中7名が興味を示さなかった行動を全く見せなかった。特にI児においては、色々の背景画面と桃色の背景画面では興味を示さなかった行動を多く見せているが、白色の背景画面では興味を示さなかった行動が全く見られなかった。

I児・J児・K児においては、色々の背景画面での興味を示さなかった行動の割合が他の背景画面に比べ、非常に高いことが明らかになった。

表6 一人一人の興味を示さなかった行動の割合の合計より

	興味を示さなかった行動の割合 (合計)			
	色々 (%)	白 (%)	桃 (%)	緑 (%)
A児	8.1	1.7	2.2	2.5
B児	17.2	1.1	1.7	3.5
C児	7.0	1.1	0.0	1.9
D児	16.1	0.0	11.2	25.2
E児	19.0	0.0	0.0	4.4
F児	6.5	0.0	1.1	4.1
G児	2.6	0.0	0.0	4.7
H児	15.1	0.0	1.1	2.5
I児	123.4	0.0	24.0	6.0
J児	77.9	5.1	3.4	28.0
K児	66.4	5.6	3.4	2.2
L児	1.0	0.0	0.0	7.5

7. 全体考察

本研究の全体の結果として、白・桃・緑の3色及び視覚的刺激のある4つの背景画面での絵本の読み聞かせにおける「興味を示した行動」と「興味を示さなかった行動」については、以下の2点が確認できた。

第一に、興味を示した行動は、白色の背景画面で多く見られたということである。この点は、1人1人に差異はあるものの、本研究手法によれば、全体的傾向として推察できる。一方、緑色は、断定はできないが興味を示した行動が見られない傾向があった。

この結果から、例えば絵本の構成を見ると、

乳児絵本の枠組みが白色であることが多いことは、乳幼児の興味行動に対する配慮ではないかと推察できる。つまり、絵本の読み聞かせ環境に関しては、視覚的刺激が多い環境を避けるのみではなく、日によって・絵本の内容により、白色の背景画面の中で読み聞かせを行うことで幼児の興味を惹く（幼児が集中できる）と考えられる。

また、緑色は、興味を示した行動の数値が4つの背景画面の中で2番目に高く、興味を示さなかった行動の数値も2番目に高い結果ではあるが、当時の読み聞かせの際、対象児の母親がお迎えに来たことや読み聞かせ場면을覗いていたことにより、幼児の視線が母親に移ったことが要因に含まれている。したがって、緑色の背景画面での結果については幼児の興味行動を正確に読み取ったとは言い難い。

第二に、興味を示さなかった行動は、視覚的刺激のある色々の背景画面の割合が高かったということである。この点は、本研究手法から明らかに確認できたと言える。また、白色は、興味を示さなかった行動割合が低かったため、幼児の興味を助長する背景画面でもあると考えられる。

このように、色々の場面では幼児が興味を示した行動が生まれにくいことが示されたが、今現在の保育現場においては、人が多く行きかったり、周りの人の声や音が聞こえたりする刺激の多い環境の中で絵本の読み聞かせが行われているのは事実である。保育室内で何も刺激のない環境を作るということは確かに難しいことであるが、小学校が黒板の周りの情報を減らして児童にとって集中できる環境を整えているように、保育現場でも小さな工夫から始めてみる必要があるであろう。

つまり、幼児は絵本に興味をもったとしても、環境によって興味を持続することが難しいと言える。

8. 今後の課題

本研究では、人が安心する色であると言われる白・桃・緑色を背景画面にした場合と刺激の

多い場면을背景にした場合での幼児の興味を示した行動の違いに着目をした。本研究の手法を通じて見えてきた課題は、次の点である。

まず、絵本の内容や読み聞かせを行う時間帯等によっても結果は変化してくる可能性があるということである。本研究手法では、対象者の人数が12名であったため、今後、調査対象の幅を広げ追跡を行っていくことが必要であろう。

また、黒色のように、一見「人に悪や負のイメージを与える。環境の中に黒一色では寂しい感じを思わせる。」と言われるような色が背景画面であった場合はどうであるのか。今後も様々な背景画面での読み聞かせ実践を分析していくことにより、絵本の読み聞かせ環境以外の場面でも環境構成の際に活用していくことができるのではないかと考える。

さらに、今回示された「幼児一人一人のカテゴリー別割合の分析結果」をカテゴリー別に詳細に見つめていくことで、幼児一人一人の特徴やそれぞれに合った環境構成を検討できないか。

環境を通して行う保育といわれるように、保育において環境構成が重要な役割を果たしていることは明らかである。今後、本研究が「幼児が安心して、落ち着いて興味を示したものに向きあえる環境構成」「自身の表現を出せる環境構成」を検討していく際の一助となればと考える。

9. おわりに

本稿では、保育の場面、ここでは絵本の読み聞かせの背景画面が幼児の自らの姿にいかなる影響を与えるのかを考えてきた。

保育の場面1つにおいても、その場면을構成する保育環境が幼児の育ち、特に主体的な応答に関与し、興味行動を引き出す何らかの影響に付与していると言える。

こうした見方で、保育に携わる保育者自らが自分たちの保育場면을振り返り、日々の保育実践の中で保育環境を見つめ直し、保育場面の意味付与について確認すべきではないか。

付記：本稿は2019年12月に筆者高村が第26回教育資料研究会で発表した内容に、熊田と高村が、保育場面の環境の意味付与について保育者の保育環境の捉え方を検討することを提示し、まとめたものである。

謝辞：本論文を作成するにあたり、多くの方からご支援、ご協力を賜りました。はじめにご多忙中にも関わらず、本研究に快くご協力を下さったA保幼園の先生方と園児の皆様方、保護者の皆様に心より感謝し、お礼を申し上げます。先生方の優しさと温かさ、そして、子どもたちの笑顔に励まされながら研究を進めることができました。深く感謝いたします。

〈引用参考文献〉

- 1) 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳, 2013, 『ベーシック絵本入門, ミネルヴァ書房, p66
- 2) 小林真, 1997, 「集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応 - 年齢性差と座席の位置による影響について - 」, 『児童文化研究所報』
- 3) 高村真希, 2017, 「保育者養成校での絵本の実演に関する一考察 - 保育内容言葉に依る学生の応答シートの分析から - 」, 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 教職課程研究 第3号』
- 4) 岐阜女子大学, 2011, 『教員採用試験対策資料集 Vol4「教育情報研究」』, 岐阜女子大学 文化創造学部 初等教育学専攻
- 5) 余郷裕次, 2010, 『絵本のひみつ』, 南日本新聞社
- 6) 瀧薫, 2010, 『保育と絵本 発達の道すじにそった絵本の選び方』, エイデル研究所
- 7) 中川素子, 2014, 『絵本学講座1 絵本の表現』, 株式会社朝倉書店
藤本朝巳, 2015, 『子どもと絵本』, 人文書院
- 8) 佐々木正美, 2017, 『はじまりは愛着から』, 福音館書店
- 9) 高村真希, 2020, 「絵本の読み聞かせによる幼児の興味を示した行動に関する研究 I - 3つの背景画面の違いに着目して - 」, 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 教職課程研究 第7号』
- 10) 宮本雄太・秋田喜代美・辻谷真知子・宮田まり子, 2016, 「幼児の遊び場の認識:幼児による写真投影法を用いて」『乳幼児教育学研究』(25)

[注]

表7 高村がまとめた選択した絵本の内容と選定理由・サイズ・読み聞かせに使用した時間一覧

林明子と筒井頼子の絵本の特徴	林明子は著書「絵本作家のアトリエ3」の中で、絵をかく時には人物を実際に見ることや写真に残すことで人の関節のつながりまでをリアルに描いていると述べている。また、人物だけでなく、動物を描く際も同様で実際に見ることを大切にしているようだ。さらに生田（2013）は、筒井頼子の作品には子育て経験から生活感が溢れた文章表現がされているという。そして、この二人の共作は文章とイラストから家庭の温かさや親子の情愛等が伝わってくると述べている。まさに母親が子どもとの経験から創り上げられた名作である。
題名	「おでかけのまえに」
作者・出版年	筒井頼子作 林明子絵 福音館書店 1980年
サイズ	22×20.5cm
時間	2分59秒
内容と選定理由	主人公のあやこはピクニックへ出かける準備を手伝いたくて、次から次へとお手伝いをする。一人前になった自分も大人のように何でもできるんだという、あやこの内にある気持ちが行動からも伝わってくる。さらに、お弁当を「つめてあげたの」という言葉や自身の姿ややったことを「みて!」という言葉からはあやこの自信に満ちた思いも伝わる。しかし、このお手伝いは大人から見るとまだまだ未熟であることはたしかである。このまだまだなお手伝いでも役に立ったと思いつつ満足している姿が3歳児の発達の特徴を捉えている。場面がピクニックという点でも子どもたちにとって身近なものであるということから、3歳児の子どもたちが自分と主人公をリンクさせやすいのではないかと考え、選択した。
題名	「おいていかないで」
作者・出版年	筒井頼子作 林明子絵 福音館書店 1983年
サイズ	22×20.5cm
時間	2分58秒
内容と選定理由	主人公のあやこはお兄ちゃんと同じことがしたくてたまらない。身近な人の模倣をし、同じことをしたい。私もできるんだというあやこの姿はまさに自我の芽生えである。おにいちゃんがあやこの人形をつかんだ時に発する「その子にさわっちゃだめ!いまねたばかりよ」「ほら おきちゃった。かわいそうに…。よしよし…」という言葉から、3歳児のアニミズム的思考がうかがえる。また、あやこが日常生活にごっこ遊びを取り入れているという点でもまさしくぴったりの発達段階であると思われる。そして、お兄ちゃんに「とちゅうでおしっこなんていうなよ」と言われ、おしっこに行く様子やトイレの前に脱ぎ捨てられたパンツはどこか家庭や保育施設でも見られる3歳児のトイレトレーニングの姿であると思われる。この点から選択をした。
題名	「あさえと ちいさいいもうと」
作者・出版年	筒井頼子作 林明子絵 福音館書店 1979年
サイズ	19.5×27cm
時間	5分18秒
内容と選定理由	妹のあやちゃんがお母さんがいないことに気づいた、泣いた時に「よしよし、あやちゃん。おねえちゃんがあるんであげる。さあ おいで」と声をかける主人公あさえの姿からは、お母さんになりきっている様子がうかがえる。言葉や話し口調等、なんでも大人の真似をする子どもらしい姿である。子どもが大人の語りかける言葉を模倣することから、自分の言葉を獲得する姿である。また、あやちゃんがなくなった後のあさえの姿はお母さんそのものであり、自分より小さいものを守りたいという意識が芽生えているように感じる。そして、なにより見つけた後の自然と妹を抱き上げる姿からも感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察することができるようになったことや、不安と愛しさの感情を理解し始めていることがうかがえる。さらに、あさえの意志力と3歳から4歳への気持ちの動きを見事にとらえた絵本であるため、この絵本を選択した。
題名	「いもうとのにゅういん」
作者・出版年	筒井頼子作 林明子絵 福音館書店 1983年
サイズ	27×19.5cm
時間	6分24秒
内容と選定理由	あさえは妹のあやちゃんの入院を通して、大事な人形を貸してあげる我慢と共に、大好きなお母さんを独り占めさせてあげるという我慢を覚えている。また、入院を通していつも一緒に過ごしている人（家族）と過ごせない心細さや不安な気持ちを何とか抑えようとしている姿もうまく書かれている。妹のあやちゃんのことを思い、「あやちゃんが、もっとよるこぶものって、なにかしら…」と考えている様子からも相手のことを思いやる気持ちが育ち始めていることがうかがえた。妹がいることで玩具の我慢・お母さんの愛情への我慢が描かれていることから、第2子（妹・弟）がいる子どもたちにとっては生活場面での身近な感情であると思い、この絵本を選択した。